

『エデンの東』におけるサミュエルの研究

当麻, 幸子

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

111

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2000-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004652>

『エデンの東』におけるサミュエルの研究

当 麻 幸 子

『エデンの東』 (*East of Eden*) (1952) は、ジョン・スタインベック (John Steinbeck) が全身全霊を傾けて執筆した作品である。彼は、まだ構想を練っている段階から、

... more and more I see that this book is the book and it has to be done by me. . . . it certainly will be the largest and most important work I have or maybe will do. . . . I want all my material to be right and correct.¹¹

と考え、また、

It is what I have been practicing to write all of my life. Everything else has been training. . . . It is going to be the best that I have learned and a lot that I have never even indicated. . . . I wouldn't care if it took all of the rest of my life if I got it done. It is going to take enormous energy.¹²

とも述べている。

もともこの作品は、スタインベックが2人の息子に、母方の先祖、ハミルトン (Hamilton) 家の歴史を伝えるために書かれる予定であり、彼はパスカル・コヴィチ (Pascal Covici) に宛てた手紙の中で、“In fact all of the Hamilton stories are true.”¹³と語っている。しかし、創作の途中で、フィクションの部分の比重が大きくなったため、スタインベックは最初の計画を変更しなければならなかった。それでもなお、彼はハミルトン家の人間を作品に絡ませたのである。

このことについて、ピーター・リスカ (Peter Lisca) は、

Steinbeck simply shifts back and forth between the Trasks and the Hamiltons with no apparent purpose or method, and his efforts to keep the two stories abreast result in many awkward flashbacks and lacunae.

Some of these anecdotes, such as the death of Dessie, the suicide of Tom, and Olive's airplane ride, are interesting in themselves, but at no point do they contribute to some greater purpose, and they remain essentially distracting and unintegrated fragments.⁴¹

と述べている。

確かに、ハミルトン家の人間でトラスク (Trask) 家と関わりを持つのはサミュエル (Samuel) とウィル (Will) だけで、残りの人物は、本筋とはあまり関係のない独立したエピソードの中で登場するに過ぎない。

しかし、それでもなおサミュエルは印象深い。彼がトラスク家と接触するのはわずかに4回だけであるにもかかわらず、彼は単にハミルトン家の人間、実在の人間という枠を超えて、作品全体に影響を及ぼしているのである。

そこで、サミュエルがこの作品でどのような役割を果たしているか考察し、スタインベックは彼を通して何を描こうとしたのか、論じてみたい。そして、『エデンの東』のテーマを探ることにする。

サミュエルがトラスク家の人間と関わるのは、アダム (Adam) が自分の土地に井戸掘りを依頼してからである。第15章では、井戸掘りを計画するにあたって、2人の間にいろいろな会話がなされる。サミュエルは井戸掘りの名人で、過去に多数の井戸を掘り当てており、今回もアダムのために井戸を掘ることを承諾する。

しかし、ここで「井戸掘り」が意味していることは、単純に文字通り井戸を掘ることにとどまっているのだろうか。著者は、この言葉の裏に、何か特別な意味を持たせてはいないだろうか。

そこで、スタインベック文学と関わりの深い聖書では、井戸はどのように扱われているか、見てみよう。

はじめに、井戸とは水を得るために掘られるものだから、その水について考察したい。まず、“And a river went out of Eden to water the garden”

(*Genesis*, 2:10) というように、水無しでは肥沃な大地は考えられない。そして、土地が乾燥し、雨が少ないところでは、水は大変貴重なものであるから、水の発見は祝われるべきことである。

16 And from thence they [the children of Israel] went to Beer: that is the well whereof the LORD spake unto Moses, Gather the people together, and I will give them water.

17 Then Israel sang this song, Spring up, O well; sing ye unto it:

18 The princes digged the well, the nobles of the people digged it, by the direction of the law-giver, with their staves. (*Numbers*, 21:16-18)

そして、水は祝福の象徴となる。

2 He [the Lord] maketh me to lie down in green pastures: he leadeth me beside the still waters.

3 He restoreth my soul: . . . (*Psalms*, 23:2-3)

これらの記述からわかるように、水は物質的にも精神的にも非常に大切なもので、それを得るために井戸が掘られたのである。そして、井戸掘りは容易なことではなかったため、泉と同様、大変貴重なものとみなされた。さらに、“A fountain of gardens, a well of living waters, and streams from Lebanon.” (*The Song of Solomon*, 4:15) という記述や、“Therefore with joy shall ye draw water out of the wells of salvation.” (*Isaiah*, 12:3) という記述から、水の豊富な井戸は、至上の美と幸福にたとえられることがわかる。

スタインベック文学は、そもそも水と切っても切れない関係にある。『二十日鼠と人間』 (*Of Mice and Men*) (1937) でも、『赤い小馬』 (*The Red Pony*) (1937) でも、『怒りの葡萄』 (*The Grapes of Wrath*) (1938) でも、『真珠』 (*The Pearl*) (1947) でも、重要な場面では必ずといっていいほど、スタインベックは水を小道具に使う。それは川の水であったり、泉の水であったりするが、いずれにしても、自然に湧き出、流れているものである。彼自身がいつで

も水辺に住みたがったことから察しがつくように、彼にとって、水とは精神を癒すものであり、生きていることを実感させるものでもあった⁵⁵。

これらのことを踏まえると、『エデンの東』で井戸を掘るという行為は、文字通り以上の意味を秘めていることは明らかである。そして、川や泉は初めからそこにあり、自然に水が湧き出ているのに対し、井戸は人間の力で掘って水を出さなければならないという点は、見逃してはならない。つまり、井戸の水は人間の営為功績によって初めて得られるということである。川や泉を発見することも、たやすいことではないかもしれないが、水脈を発見し、井戸を掘り当てるということは、さらに困難な仕事といえよう。井戸を掘るという行為には、自らの力で大切なもの、必要なものを勝ち取ろうとする、人間の前向きな意志が不可欠であり、初めからあるものに頼るより、ずっとエネルギーが要る。

このように考えると、スタインバックは、井戸を掘ろうとする人間を、何かにすがろうとする無力な存在としてとらえているのではなく、努力によって自ら道を切り開いていこうとする存在としてとらえていることがわかる。井戸を掘って水を得るということは、人間が自分にとって大切なもの、なくてはならないものを、自分の力で手に入れるということなのである。そして、その仕事を買って出るサムユエルは、注目に値する人物といえる。

しかも、サムユエルは、ただ闇雲に井戸を掘っているわけではない。アダムが自分の理想、夢の世界にうっとりとしていて現実が全く見えていないのに対し、サムユエルは、現実がもたらすかもしれない危険性にも気付いている。

I [Samuel] should warn you [Adam] to look closer until you can see how ugly it [what Adam dreams] really is. . . . And I should straighten out your tangled thoughts, show you that the impulse is gray as lead and rotten as a dead cow in wet weather.⁵⁶

このように、サムユエルはアダムに警告を与え、(もっとも、アダムの耳にはこの警告は届かなかったのであるが) その上でなお、必ず井戸を掘り当ててを約束するのである。ここに、サムユエルという人間の大きさを感じることができる。

しかし、順風満帆に全てのことがはこぶわけではなく、サムユエルが井戸を掘

り当てるまでもやはり困難が待ち構えている。というのは、第17章で、サムリエルは地面を掘るうちに地中に埋まっている隕石にぶつかり、井戸掘り機の歯がこぼれてしまうのである。

このため、サムリエルは一時仕事を中断しなければならなくなる。そこで今度は、彼が隕石を掘り当ててしまったことの意味を考えてみたい。

隕石については、ピーター・リスカが“the buried meteorite (falling star, hence Lucifer)”⁷⁷と述べているが、もう少しこの隕石について掘り下げてみよう。

まず、Luciferとは、ラテン語で「明けの明星」、「光をもたらす者」という意味であり、夜明けの星々の中でただ1つ神と肩を並べようとするものである⁷⁸。

次に、聖書においては、このLuciferは、“How art thou fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning!” (*Isaiah*, 14:12) と記述されている。また、イエスの言葉には、“I beheld Satan as lightning fall from heaven.” (*Luke*, 10:18) というものがある。よって、Luciferは墮落以前のSatanの名だと考えられ、それゆえ墮天使をも意味するようになる。

これらのことを考慮に入れると、サムリエルが氷の代わりに隕石を掘り当ててしまったのは、単なるエピソードではないことは明らかである。それは、大切なもの、必要なものを手に入れるのは難しいというばかりではなく、この小説ではその後不吉なことが起こるかもしれないということをも暗示しているのである。

したがって、サムリエルが隕石を掘り当てたのと同じ日に、キャシー(Cathy)が双子を出産するのも、ただの偶然では決してない。全ては著者の注意深い計算によるものである。よって、スタインベックがコヴィチに“Do you like the story of the meteor?”⁷⁹と尋ねるとき、彼はただ表面的にそのエピソードが好きかどうか尋ねているのではなく、その裏側に隠されているものについてどう思うか、尋ねているとみるべきであろう。つまり、その後起こる問題のきっかけとなるものとして、隕石の話はどう思うか尋ねているのである。

実際、隕石が不吉な予感を与えた通り、キャシーの出産は波乱に満ちたものであった。彼女は人間というより、まるで蛇のようであり、赤ん坊を取り上げようとしたサムリエルの手に噛み付き、深い傷を負わせてしまう。そして、彼

はりー (Lee) 共々この家に恐ろしいことが起ころうとしているのを感じるのである。

さらに、サミュエルが手の傷の手当てを終え、ようやく一段落着いて外に出ると、空には宵の明星が輝いている。“The evening star was so bright that it seemed to flare and crumple as it sank toward the western mountains.” (p. 259)

聖書には、「宵の明星」の記述はない。しかし、「明けの明星」、すなわち ‘Lucifer’ と同じ星が空に輝いているということ、また、「宵の明星」自体には「闇をもたらす者」という意味がある¹⁰⁾ことを考慮に入れると、この場面も単なる情景描写とは考えにくい。やはり、前途は多難であるということを暗示しているといえよう。

事実、この後キャシーは自分が産んだ双子には何の愛情も感じることなく、アダムを撃って逃げ、そのショックからアダムは廃人同様になってしまう。そしてその後も、まだまだ問題は続いていくのである。

しかし、このように厳しい現実から、サミュエルは一度も目を反らさない。それらのことはサミュエルには何の責任もないにもかかわらず、彼はアダムと共にある。まるで抜け殻のようになってしまったアダムを訪れ、“I thought I'd better get back to the wells.” (p. 283) と話しかけ、無気力のアダムに “Act out being alive, like a play. And after a while, a long while, it will be true.” (p. 283) と助言を与え、さらに、“Don't think it [the garden of Eden] will ever die. . . . Don't expect it. . . . I tell you it won't ever die until you do.” (p. 358) と説くのである。

サミュエルは、アダムがもう井戸は必要ないと言ったからといって、そのまま去っていつてしまわない。彼は、文字通りの井戸掘り職人としてのみ存在するのではなく、心の井戸に水を満たすために、つまり、人間にとってかけがえのないものを、地中深くから掘り起こして、瑞々しさを与えるために存在している。彼は、アダムを導く者として描かれているのである。

とはいっても、サミュエルも神ではなく、一人の人間である。よって、彼にも人間の弱さがある。この、弱い、陰の部分があるからこそ、彼は深みのあるキャラクターとして印象に残るのであろう。もし、彼がただ強く、逞しく、輝かしく、常にリーダーシップをとるだけの人物であれば、彼はもっと面白味のない人間になってしまったに違いない。

そこで今度は、サミュエルの弱さについて考え、彼がそれにどのように対処するのか見てみよう。そして、彼がどのような人物であるか、また、この作品にどのような影響を与えているか、考察したい。

娘のユナ (Una) が死んでしまうと、サミュエルはそのショックからなかなか立ち直れずに、老人になってしまう。そんな彼を子供たちは見るに見かねて、皆で面倒をみようとして計画を立てる。彼らはそれとなく計画を実行に移すつもりだったのだが、サミュエルはその計画に気付いてしまう。そのときの彼の様子は、次の通りである。“There was the sardonic look on his face his family knew so well — the joke on himself that made him laugh inwardly.” (p. 378)

このサミュエルの表情から、彼の寂しさや悲しさを読み取ることができる。それは、娘が死んでしまったことに対する寂しさや悲しさではない。周りの者に自分が老いたと思われていることに気付いてしまった寂しさ、悲しさであり、また、実際自分自身も老いたと実感してしまった寂しさ、悲しさである。

しかし、彼が真の強さを発揮するのは、まさにこのときなのである。長年暮らした土地を離れる決心を固めると、彼は近所の人に一人一人別れのあいさつをしに行く。そのときの彼の態度は、とても決然としていて潔い。

Places were very important to Samuel. The ranch was a relative, and when he left it he plunged a knife into a darling. But having made up his mind, Samuel set about doing it well. He made formal calls on all of his neighbors. . . . And when he drove away from his old friends they knew they would not see him again, although he did not say it. He took to gazing at the mountains and the trees, even at faces, as though to memorize them for eternity. (p. 385)

もし、人間が、一つの生命がこの世に誕生し、生きていくことを受け入れることができるのであれば、その生命が老い、死を迎えるということも、生あるものの自然の成り行きとして、同じように受け入れていいはずである。老いも、死も、本来悪いことではないのだから、否定する必要はないのである。

サミュエルが心を入れ替えるきっかけとなったのは、おそらく息子のトム

(Tom) が彼に敬意を表して、内緒にしておくはずだった計画を打ち明けたことである。しかし、結局サミュエルは誰の力も借りず、自分の力で現実を真正面から受け止め、そしてそれにどう対処すべきか、自分の道を選ぶ。だから、彼が自分の土地を離れ、子供たちの世話になる決心をしたのは、彼が諦めてしまったということでは決してない。彼は自分のとるべき道を選び取ったのである。

サミュエルは、かつては死を受け入れることができず、また信じることもできなかった。しかし、トムの真摯な態度に触れて、彼は何が変わっても、自分は自分であり、自分の道を決めるのは自分しかいないと気付く。生命あるものはいつか果てるという自然の法則を素直に受け止めることができたとき、彼は自らの死をどのように迎えるべきか、死が訪れるまでどのように過ごすべきか、自分の道を選ぶのである。

言葉を変えれば、彼は 'timshel', 'thou mayest' を自らに行使したということである。『エデンの東』では、善と悪、愛と憎しみが表裏一体であるということが何度も繰り返されるが、ここでサミュエルが実感したように、人間の強さと弱さ、若さと老い、生と死も、表裏一体である。そして、それらから何をどのように選び取るかによって、人間の価値が決まるのである。

よって、サミュエルの "That [to take a rest] is what I had to accept, and I have accepted." (p. 390) という言葉には、彼の考え方の推移が凝縮されているといえよう。彼は、自分の残りの人生を捨ててしまったわけではない。心の整理をつけ、今後の道を決めたということである。

だからこそ、別れ際に、彼はアダムに影響を与えることができるのである。彼は、キャッシュを失った後いつまでも無気力なままのアダムの心を呼び覚ますことに成功する。また、改めて井戸掘りを手伝ってほしいというアダムの願いを断りはするものの、 "I'll see it in my mind when I'm in Salinas. . . . And maybe I'll get to believe it happened." (p. 391) と答え、アダムを励ます。

彼がアダムにキャッシュの居場所を告げたときでさえ、残酷なやり方ではあるが、彼はアダムに選択の権利を与え、道を示している。彼は、ただ盲目的に優しい男ではない。しかし、一見冷酷ともとれる行動にでるときですら、彼はアダムを見捨てたわけではないのである。彼は常にアダムの一歩前を行き、アダムを導いている。

サミュエルは、リーに語る。

‘Thou mayest.’ It took me by the throat and shook me. And when the dizziness was over, a path was open, new and bright. And my life which is ending seems to be going on to an ending wonderful. And my music has a new last melody like a bird song in the night. (p. 405)

この言葉から、サミュエルは、選択の権利を自らに行使したことがわかる。彼は、自分の選択が正しいと信じているし、そういう自分に満足してもいる。そしてこの自信が、アダムを導くことになる。彼は、“Surely most men are destroyed, but there are others who like pillars of fire guide frightened men through the darkness.” (p. 405) と述べているが、彼こそまさに、“pillars of fire” と呼ぶに相応しい人物なのである。

この、サミュエルが別れを告げる場面で、夜空に星が輝いているのは、印象的である。すなわち、その晩は、“It was one of those clear early winter nights when the sky riots with stars and the earth seems doubly dark because of them.” (p. 399) であるけれども、“The old man [Samuel] stroked his beard, and it shone very white in the starlight.” (p. 404) という描写や、“He [Lee] turned and looked after it, and on the slope he saw old Samuel against the sky, his white hair shining with starlight. (p. 406) という描写からわかるように、星々はサミュエルを照らす光なのである。

ここでの星は、天上に輝く星である。つまり、隕石（すなわち falling star, または Lucifer）ではない。よって、この場面では、キャシーが出産した日のような不吉な予感を感じられない。星たちは、サミュエルを遠くから見守るもの、また、太陽のように強く、激しい光ではないが、優しく彼を照らすものとして描かれている。それらは、彼を包み込み、祝福しているかのようにも見える。

サミュエルが出てくるのは、この場面が最後である。彼が死ぬシーンは描かれず、ただトムが電報を受け取るだけである。しかし、死後も彼は忘れ去られない。折りに触れているいろいろな人が彼のことを思い出し、懐かしみ、そして彼に導かれる。それは、リーが“Maybe both of us [Adam and Lee] have got a piece of him [Samuel]. . . . Maybe that’s what immortality is.” (p. 435) と語る通りである。また、リーは、“He [Samuel] had so much, he was so

rich. You couldn't give him any more." (p. 752) とも回想している。

このように、サミュエルは死後も周りの人々に影響を与え続けるのであるが、それは全てスタインベックの計算によるものである。著者がいかに気を遣ってサミュエルを書き上げたかは、"I hope I am going to show you [Covici] Samuel in a kind of golden light, the way such a man should be remembered."¹¹ や、"I am not going to take the reader to his [Samuel's] death. . . . I will only report it in this part. In this way I will keep him partly alive. . . like the memory of a man."¹² や、"I want Samuel to go out with wonder and interest."¹³ という言葉からよくわかる。

さらに具体的な例としては、アダムがキャシーと再会し、自分は自由になったと感じる件を執筆するにあたって、スタインベックがコヴィチに語った言葉を挙げることができる。

Did you feel that Samuel had got into Adam and would live in him? Did you feel the rebirth in him? Should I make it clearer or were you aware of it? Men do change, do learn, do grow. That is what I want to get into the last.¹⁴

以上のことから、スタインベックがどれほどサミュエルを重要視しているかわかる。しかし、彼は何故そこまでサミュエルに深い思い入れがあるのだろうか。

彼は、かなり早い時期に "Not being brave I am glad when I can make a brave person whom I believe in."¹⁵ と語っている。つまり、彼は自分の憧れを、サミュエルという形で表したのである。確かに、サミュエルは実在の人物で、鍛冶屋であり、井戸掘り職人であり、発明家であった。しかし、『エデンの東』では、それだけにとどまらない。スタインベックは、自分の理想の人物として、サミュエルを創り上げたのである。

この作品を書くまでに、スタインベックには実にいろいろなことが起こった。その中には、エド・リケッツ (Ed Ricketts) の死や、グウィン (Gwyn) との離婚も含まれる。それら乗り越えてこの作品を書き上げられたのは、イレイン (Elaine) のお陰でもあるが、彼自身、そうするだけの強さを望んでいたのは本当だろうし、自分がどうあるべきか、理想の人間とはどういうもの

なのか、相当考えたはずである。そうして生まれたのが、実在の人物を超えたサミュエルというキャラクターだったのである。

ルイス・オーウェンズ (Louis Owens) は、“He [Samuel] loomed gigantic in the novel and dragged his family along with him, effectively disrupting the novel’s working out of the twin central themes of the Fall and Rejection.”⁴⁶ と述べている。確かにそれも一理ある。しかし、スタインベックとしては、自分の理想の人物として、サミュエルを登場させずにはいられなかったのであろう。

スタインベックは、この作品の原稿を自ら彫り物を施した箱に入れ、コヴィチに贈ったが、その時の手紙で、“Nearly everything I have is in it and it is not full. . . . And still the box is not full.”⁴⁷ と述べている。それは、人間の命は受け継がれ、人類の歴史はずっと続いていくから、どこまで書いても終わりが無いという意味でとらえることができる。また、それだけではなく、選択の権利、自由意志を持っている人間の素晴らしさは、いくら称えても称えきれないという意味であるとも考えられる。

そのように考えると、この作品は、周りの者を導いたサミュエルへの讃歌であり、サミュエルに導かれて選択の権利、自由意志を受け継いだその他の登場人物への讃歌であり、また、エド・リケッツの死やグウィンとの離婚を含め、幾多の苦難を乗り越えてきたスタインベックが、自分自身に向けた讃歌でもある。

スタインベックがこの作品でサミュエルを通して伝えたかったこと、それは、人間はいかに素晴らしいものであるかということである。『エデンの東』は、全ての人を称える物語なのである。

〈註〉

- (1) Elaine Steinbeck and Robert Wallsten ed., *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1975), p. 308.
- (2) *Ibid.*, p. 310.
- (3) John Steinbeck, *Journal of a Novel: The East of Eden Letters* (New York: The Viking Press, 1969), p. 63.
- (4) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, N. J.: The Rutgers University Press, 1958), p. 266.
- (5) 稲澤秀夫『ジョン・スタインベック文学の研究』(学習院大学研究叢書28, 第一法規出版株式会社, 平成7年)の第10章に、スタインベック文学と水の関係が詳しく述べられている。

- (6) テキストはJohn Steinbeck, *East of Eden* (New York: The Viking Press, 1952) を使用した。以下の引用はこの版による。
- (7) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, N. J.: The Rutgers University Press, 1958), p. 269.
- (8) マンフレート・ルルカー著, 池田絏一訳『聖書象徴事典』(人文書院, 1988年) p. 2.
- (9) John Steinbeck, *Journal of a Novel: The East of Eden Letters* (New York: The Viking Press, 1969), p. 82.
- (10) アト・ド・フリース著, 山下主一郎主幹『イメージ・シンボル事典』(大修館書店, 1984年) p. 602.
- (11) John Steinbeck, *Journal of a Novel: The East of Eden Letters* (New York: The Viking Press, 1969), p. 109.
- (12) Ibid., p. 111.
- (13) Ibid., p. 115.
- (14) Ibid., p. 124.
- (15) Elaine Steinbeck and Robert Wallsten ed., *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1975), p. 119.
- (16) Louis Owens, *John Steinbeck's Re-vision of America* (Athens: The University of Georgia Press, 1985), p. 154.
- (17) Elaine Steinbeck and Robert Wallsten ed., *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1975), p. 433.